

コロナ感染レポート

2年以上に及ぶコロナ禍でFHもその例にもれません。特に若い子どもたちの養育を担っていることから、外との接触＝感染リスクは高いと言えます。今回はコロナに罹患したFHの方から報告をいただきました。

東京都 陽気ぐらしの家わかさ 若狭佐和子

我が家は、12人家族中6人が、4月23日から5月14日まで3週間、コロナ感染の渦中にありました。養育者である私と夫二人とも入院という大ピンチ。



1. 感染は

同居の私の両親が、故郷の奈良に帰った折、友人との会食でうつってきました。両親とは皆マスクなしで会話をし世話をしていました。旅行から帰って1週間後、父はトイレまで歩けなくなり、救急車を呼んだ時には、熱も上がり、酸素飽和度も低く、コロナを疑われ、病院に運ばれました。両親、私達夫婦、15歳里子と31歳の元里子の6人が感染しました。

2. 救急車で病院に運んだ経緯

父の具合が悪くなり救急車で病院に運んでもらいました。そこでPCR検査での陽性が確認され、コロナ患者を受け入れている病院に転院。もし救急車を呼ばず、一日我慢をしたりしたら、父の命はなかったのではないかと思います。

3. PCR検査 濃厚接触者は保健所からの指示がないと動けない

東京都発熱相談センターでは、濃厚接触者は保健所からの指示がないと、発熱していても病院を紹介出来ないと言われ、「呼吸が苦しくなるなど、症状が悪化したら救急車を呼んでください」との事でした。

この数日の間も子どもたちに感染が広がったらと思い、児童相談所に報告するとともに、児童相談所から保健所へかけあってもらい、その日のうちにPCR検査キットを児相職員の方が届けてくれ、翌日の朝一で取りに来ていただきました。

前日の日曜日には私も咳が出始めました。母、私、夫の3人が検査。母と私は陽性でした。

月曜日の午後、咳や熱の症状が出始めた里子と元里子は、ようやく連絡がきた保健所の指示で、火曜日に PCR 検査を病院で受け、二人とも陽性でした。

ファミリーホームの場合、感染拡大を防ぐためにも早めの検査は重要だと痛感しました。



4. ゾーン分け

症状が出た人は、各自の部屋で隔離し、使用するトイレも分け、入る前と出る時の消毒を必ず行うように言いました。症状のある人の食事は、部屋の前まで運び、部屋の外から体温と体調を聞くようにしました。

日本ファミリーホーム協議会に状況を報告すると、直ぐに防護服を送っていただき、症状のある人の部屋の様子を見に行くことも出来るようになりました。

陽性が確認された後、陽性者は、別棟の一軒家に移動しました。陽性同士であれば同じ生活空間でも大丈夫です。むしろ、陽性になる可能性のある陰性の人たちの方が生活に注意が必要で、体調観察と消毒作業は欠かせません。

5. 隔離期間

自宅療養の陽性者は、無症状もしくは風邪症状くらいの場合、症状がなくなってから3日以上経っていれば、10日間の隔離となります。コロナは発症から10日経てば、人にうつすことはないそうです。症状が続く時には、療養は続きます。

一方、陰性の家族（同じ家に住んでいる人は、濃厚接触者扱いとなる）は、陽性者が判明した次の日から14日間、仕事や学校は出勤出席停止となりますが、人が少ない時間に、公共交通機関を使わず、近場へのお買い物程度であれば外出可能でした。

6. 自宅療養

自宅療養者には毎日保健所から体調を聞く電話が入ります。高校生は、東京都のフォローアップセンターの対応となり、LINEで1日2回体調報告をし、その報告を見て心配な場合は電話がかかってきます。

酸素飽和度を測るパルオキシメーターで、数値が95以下の時は入院、93以下になったら救急車を呼んでください。と言われました。自宅療養者には、希望すれば1週間分の食糧が東京都から届きます。一人3箱の段ボールが届き、体調に合わせて食事が摂れるよう、さまざまなレトルト食品や飲みもの、おやつなども入っていました。

陽性者専用の保健所の電話番号が知らされ、緊急の時に直接保健所と連絡がとれるようになっていました。

7. 入院

父は、コロナ感染症専門の病院に転院し、レムデシビルと肺炎のステロイド剤、酸素吸入の治療を続けていただき、快方に向かいました。母は、症状は重くありませんでしたが、軽い肺炎を起こしており、高齢だったこともあり、陽性がわかった時点で入院を希望しました。「高齢（60歳以上）の場合、急変した時に、人工呼吸器を使っても回復出来る見込みがないけれど、それでも人工呼吸器（延命治療）を使うことを希望されますか？」と、何度も確認されました。「人工呼吸器はいりません」と答えました。

私（52歳）も入院を勧められましたが、子どもたちが心配なので、自宅療養を希望しました。発症から4~5日経って熱が出始め、3日間高熱が続いたので、肺炎になっているようなので入院した方が良く保健所から言われました。陽性の子どもたちの体調も落ち着いていたため、入院することにしました。夫も持病があり、高い熱が出て酸素飽和度も低くなり入院となりました。

8. 夫婦とも陽性、入院となってしまうたら？

もし夫婦とも陽性になってしまったら、子どもたちをどうすれば良いのか？児童相談所が一時保護してくれるのか？いや、それとも全員ホテル療養などできないか？等々色々と考えましたが、どれも難しく感じました。でもいざとなったら、児相に頼んで何とかしてもらうしかない。というところで考えは止まってしまいました。

9. チーム陽気の活躍

夫婦が入院した折、補助者として時折子どもたちの世話をしてくれる実子の娘たち（2人とも自立して別居）と、4月に立ち上がってまだ入所者のいない自立援助ホームの職員さんたち、そして日ごろから子どもたちと交流して我が家に出入りしている人たちが、PCR検査をし、陰性を確認して、手伝ってくれ「チーム陽気」というグループLINEが立ち上がり、シフトを組み、実子たちも仕事をリモートワークにし、泊まり込みで家の中のことを仕切ってくれました。

10. 関係機関との連絡

家族間、チーム陽気の他、保健所、病院、学校、児相、療育機関、かかりつけ医等々、連絡をとらなければならない場所がとてたくさんありました。ほとんど私に対応していましたが、私が比較的元気で、入院した病院も電話が出来たので良かったですが、日ごろからホーム長以外にも対応できる人がいた方がより安心かもしれません。

11. 退院の基準

6人中4人が入院しましたが、全員別の病院でした。入院期間はばらばらでしたが、基本は1

週間。治療が終わってから3日間経過観察をし、経過良好であれば退院できます。退院後通院があるかないかも症状と病院によるようです。夫は1週間、私は10日間、母は15日間、父は22日間の入院でしたが、ほぼ同じ時期に退院し、発生から3週間後、通常に戻りました。

12. コロナ感染後の生活

コロナ感染後は、家の中でもマスクを出来る限り付けています。共用部分の消毒をこれまで以上にし、各部屋と共用部分との出入りの時、消毒が出来るよう、アルコール消毒液をあちこちに置いてあります。これまで食事は、自分の食べる分だけ取り箸で取っていましたが、取り箸が共用だったため、1人ずつ取り分け、黙食を推奨しています。食事の準備の時は、マスクと手袋をつけています。これまでも外から帰ったら手洗いうがい、共用部分の消毒、パーテーションの設置など、感染防止対策をやっているつもりでしたが、出来ていなかったことが多いことに気づかされました。かなりウイルスに対する意識は変わりました。



13. 精神的なダメージと感謝の心

コロナ感染は、精神的なダメージも少なからずあると思います。私はやはり今まで以上に家族の体調が気になり、少しの咳や、食欲のなさも気が気ではなくなります。離れている子たちまで、心配してもしきれません。夫も同じくで、ちょっとした感染リスクへの気遣いの無さに怒りを覚え、人を責めてしまいそうになる自分と闘っていたり、精神的なストレスの多さを感じます。

しかし今回、最悪の事態は免れたことについて、本当に幸運だったと感謝しています。また、我が家がクラスターとなっていることを知った人たちから多くの心配や励まし、祈りをささげていただき本当にありがたく、心強かったです。

また、ご近所の方たちも気づいても誰も噂にせず、むしろ誰にも言わず、温かく静かに見守ってくださっていたことも後から知り、地域の温かさに感謝せずにはられませんでした。

コロナに罹ったことにより、むしろ感謝の気持ちをたくさん持つことが出来て、幸せを感じることも多かったです。

コロナ禍にあり、もっと大変な思いをされているご家庭がたくさんあることを思うと、今を感謝して、何か人の役に立つことをさせてもらわなければと思い、この体験を機に、これまで以上に人のために働けるよう、心がけていきたいと思っています。

(要点を中心に編集しました。より詳細は、「ファミリーホーム通信」次号に掲載します。)